

筑波大学 CEGLOC REC-J 日本語教育セッション主催 第11回 「未来志向の日本語教育」 シンポジウム



開催日時：

2026年8月7日（金）14:00~17:00（JST）

@オンライン開催（ZOOM）

趣旨

2019年2月にシリーズとしてスタートした本シンポジウムは、21世紀の刻々と変化する状況の中で日本語教育をどのように構想することができるのかを大きなテーマとし、幅広い分野の研究者に発表および意見交換の場を提供します。本シンポジウムの発表テーマは教員養成や学習者のスキル、現場での日本語に関する調査報告など、未来の日本語教育の発展を期待できる内容となっています。

参加登録：

参加登録フォームからご登録ください（無料）

登録締切：2026年8月3日（月）23:59JSTまで

第11回
「未来志向の日本語教育」
シンポジウム 参加登録



プログラム：

詳細は2ページをご参照ください。発表要旨は3ページよりご覧ください。

アンチハラスメントポリシーについて

本シンポジウムは筑波大学CEGLOC「未来志向の日本語教育」シンポジウム
アンチハラスメントポリシーに従って開催します。
詳細は右QRコードからご確認ください。

アンチハラスメントポリシー



第11回 「未来志向の日本語教育」シンポジウム実行委員会（岩崎 拓也、関崎 博紀）
お問い合わせ先：iwasaki.takuya.gp@u.tsukuba.ac.jp

主催：



共催：



日本語学習環境支援共同利用拠点

Japanese Language Support Hub for Accessible Resources and Education

タイムスケジュール		
13:45 ~	開場（Zoom にアクセスしてください）	
14:00 ~ 14:10	開会の挨拶：小野 正樹（筑波大学 人文社会系 教授 / 日本語・日本文化総合教育研究センター長）	
	ブレイクアウトルーム 1	ブレイクアウトルーム 2
14:10 ~ 14:40	口頭発表 1 司会：鏡 耀子（筑波大学） 稗田 奈津江（筑波大学） テキストチャットにおける「笑い」の表現形式と機能 ―日本語母語話者とマレー語母語話者の比較―	口頭発表 2 司会：関崎 博紀（筑波大学） 阪上 彩子（奈良教育大学）・北村 亜耶（立命館大学） 第二言語講義聴解における推測失敗の修正過程 ―ボトムアップとトップダウン処理の相互作用に着目して―
14:40 ~ 15:10	口頭発表 3 司会：鏡 耀子（筑波大学） YANG XUAN（筑波大学大学院生） 日中接触場面における自画自賛のフェイスワーク ―LINE チャットの相互行為に着目して―	口頭発表 4 司会：関崎 博紀（筑波大学） グエン ソン ラン アイン（ハノイ国家大学外国語大学） 日本語・ベトナム語「通訳実践」授業における ピア・フィードバックのミクロ分析 ―未来志向型通訳授業を目指して―
15:10 ~ 15:20	休憩（10分）	
15:20 ~ 15:50	口頭発表 5 司会：文 昶允（筑波大学） 黒田 史彦（桜美林大学）・大森 優（神田外語大学） アカデミック・ライティング支援者のための パターン・ランゲージ： 実践知の共有と継承を支える仕組みづくりを目指して	口頭発表 6 司会：有賀 照道（筑波大学） 今中 麻祐子（東海大学：台湾） AI 支援開発による予習ツールを組み込んだ授業の試み
15:50 ~ 16:20	口頭発表 7 司会：文 昶允（筑波大学） 李 榮（神田外語大学） 「教える側」になる留学生の協働学習 ―母語フレーズ紹介活動「一日チューター体験」の実践―	口頭発表 8 司会：飯田 朋子（筑波大学） Vasilev Todor（神戸大学大学院生） 多文化クラスにおける文法指導 ―連体修飾の指導における英語媒介の限界―
16:20 ~ 16:25	総括：岩崎 拓也（シンポジウム実行委員長、筑波大学 人文社会系 助教）	
16:25 ~ 17:00	オンライン懇親会	

発表要旨

口頭発表1 稗田 奈津江（筑波大学）

テキストチャットにおける「笑い」の表現形式と機能—日本語母語話者とマレー語母語話者の比較—
本発表では、テキストチャットにおける「笑い」の表現形式とその機能について、言語間の比較を通して考察する。本研究では、SNS を用いたロールプレイを行い、日本語母語話者（JNS）とマレー語母語話者（MNS）における談話データを収集した。そして、それらに現れた笑いについて、フェイス保持の観点から分析を行った。その結果、JNS は記号を通じて、発話意図を曖昧にしている一方、MNS は絵文字と音声により、感情をより具体的に示していることがわかった。また、JNS は訂正に、MNS は謝罪者に、笑い多用の有意差が見られた。そのほか、最も多かった笑いの機能は、JNS では被勧誘者による他者フェイス充足の強化であったが、MNS では勧誘者による他者フェイス侵害の緩和であった。これにより、JNS は「相互扶助的なフェイス保持パターン」の一種として、相手からのフェイス侵害を親近感の暗示により自ら軽減していることが示唆された。

口頭発表2 阪上 彩子（奈良教育大学）・北村 亜耶（立命館大学）

第二言語講義聴解における推測失敗の修正過程

—ボトムアップとトップダウン処理の相互作用に着目して—

本発表は、上級日本語学習者によるアカデミックな講義聴解過程を対象とし、特に推測の失敗がいかに修正されるかというボトムアップとトップダウンの相互作用を詳細に分析する。

調査では、「日本語非母語話者の聴解コーパス」に掲載されている学習者のプロトコルデータを（L-CH0060,L-KR0037）を用い、Anderson(1995)のモデルに基づき分析を行う。分析の結果、「じゅぎょうりょう（授業料）」を「授業量」と推測した例では、意味が通じず、認知の遅れが生じたものの、後続の文脈を照らし合わせるトップダウン処理によって解釈の歪みに気づき、自己修復を果たすプロセスが確認された。これらの分析を通じ、トップダウンによる補償には限界があることを指摘し、精緻な解析を支えるための明示的な音声を知覚する訓練と、解釈の矛盾を察知するメタ認知モニタリング指導を提案する。

口頭発表3 YANG XUAN（筑波大学大学院生）

日中接触場面における自画自賛のフェイスワーク—LINE チャットの相互行為に着目して—

本発表では、日中接触場面における LINE チャットを対象に、自画自賛のストラテジー、および、フェイス・バランスの調整過程を明らかにする。本研究では、友人間の LINE におけるチャット履歴を収集し、中国人日本語学習者（CJL）の自画自賛が見られた 3 事例を対象に、ポライトネスの観点から談話分析を行った。その結果、自画自賛は話し手の一方的な自己評価ではなく、聞き手との相互行為の中で成立することがわかった。CJL が自らを肯定的に評価する発話を行うと、日本語母語話者（JNS）は「ポライトネスの一般ストラテジー」に従い、ほめによって応答し、相手のフェイスを支持していた。一方、CJL の母語場面では自慢し合う傾向があるとされるが、接触場面では JNS による自画自賛はみられなかった。そのため、CJL はほめの否定や自己フェイスの侵害を通じて自らを低く位置づけることで、談話全体のフェイス・バランスを調整していた。

口頭発表4 グエン ソン ラン アイン（ハノイ国家大学外国語大学）

日本語・ベトナム語「通訳実践」授業におけるピア・フィードバックのミクロ分析
ー未来志向型通訳授業を目指してー

本報告は、日本語・ベトナム語逐次通訳の授業におけるピア・フィードバック（PF）活動をミクロに分析し、将来志向型の通訳授業デザインを検討するケースとして提示する。データはベトナムの大学の「通訳実践3」を対象とする授業研究の一部であり、そのうち気候変動をテーマとする日本語スピーチの逐次通訳を扱う1コマで、特定の通訳ターン後に二つのグループが行ったPFのやり取りに焦点を当てる。相互行為論とスピーチ・ファンクション分析に基づき、PFで学習者が何を話し合い、その発話がどのような機能を担うのかを明らかにする。分析の結果、やり取りは表層的な誤用訂正を超え、意味交渉や方略的意思決定、解決案の共同構築へと展開する一方、参加度の不均衡や時間的制約がPFの潜在力を制限しうることが示され、これらを踏まえて二段階通訳サイクルやペア内の役割分担、機能別プロンプトと振り返りの時間などのデザイン原則を提案する。

口頭発表5 黒田 史彦（桜美林大学）・大森 優（神田外語大学）

アカデミック・ライティング支援者のためのパターン・ランゲージ：
実践知の共有と継承を支える仕組みづくりを目指して

日本語アカデミック・ライティング支援（AWS）は学習支援として定着しつつある。本研究では、熟練支援者の実践知を抽出・体系化した「AWS パターン」の開発に取り組んでいる。2021年の試作版（ver.1.0）発表以降、追加データの分析と全体構成や記述内容の大幅な見直しを経て、3カテゴリー、9グループ、27パターンから成る ver.2.0 へとアップデートした。さらに、象徴的なイラストを各パターンに追加し、研修用の簡易カード版と詳細説明付きのブックレット版を揃えた最新版（ver.2.1）を完成させた。本発表では、その体系と代表的なパターンを紹介し、実践知の共有・継承を支える仕組みについて論じる。さらに、本パターンが持つ、①実践を振り返る「観点」、②語り合うための「共通言語」、③実践を改善する「発想の種」としての有効性を検討し、支援者研修における継続的な活用と支援実践への転移可能性について考察する。

口頭発表6 今中 麻祐子（東海大学：台湾）

AI 支援開発による予習ツールを組み込んだ授業の試み

教科書以外の媒体を主教材とし、日本語レベルの異なる学習者が共に学ぶ授業では、内容理解の負担に個人差が生じやすい。本実践では、台湾のある大学の日本語授業（ポッドキャスト主教材・日本語能力レベル混合クラス）において、生成AIで制作した予習ウェブツールを導入し、授業への足場かけを試みた。3回の予習と授業の実施後、22名が事後アンケート（5件法24項目、自由記述2項目）に回答した。アンケート結果から本予習方法に対する学習者の認識について分析した。その結果、本予習方法への評価は全体的に高く、特に授業とのつながりでは、予習が授業内容の理解促進や授業参加への自信につながった点が肯定的に捉えられた。また、予習の流れが段階的に示されていることも学習者に支持された。一方、負担感は低いにもかかわらず複数の学習者に学習ステップの省略が自己報告された。これらの結果をもとに、本実践の有用性と課題を考察する。

口頭発表 7 李 榮（神田外語大学）

「教える側」になる留学生の協働学習—母語フレーズ紹介活動「一日チューター体験」の実践—
本発表では、多国籍の交換留学生を対象とした中級日本語（CEFR B1 相当）クラスでの母語フレーズ紹介活動「一日チューター体験」の実践を報告する。学習者は、自身の言語資源を他者に伝える「教える側」として、それぞれの母語表現を題材に資料を作成し、ビジター（主に日本語を母語とする学部生）にミニレクソンを行った。準備段階では、同言語話者と協働しながら、日本語使用を基本的に、必要に応じて母語も使いつつ内容や説明の仕方を検討した。また、ミニレクソンでは、ビジターからの質問や言い換えなどを通して、日本語表現のインプットも得ていた。3 学期にわたる教師の観察と学習者の振り返り記述から、学習者が既存の言語資源を日本語で説明する過程で、自身の母語表現の意味・ニュアンス・使用場面を捉え直し、日本語使用も俯瞰していたことがうかがえた。一方、学習者による対象レベルに応じた内容調整や、教師の支援のあり方に課題が残った。

口頭発表 8 Vasilev Todor（神戸大学大学院生）

多文化クラスにおける文法指導—連体修飾の指導における英語媒介の限界—
近年、多文化クラスでは、共通言語として英語を用いた文法指導が広く行われている。本発表では、日本語の連体修飾を対象に、英語を媒介語とする指導の有効性と課題を検討する。教材分析、授業実践および学習者の誤用例をもとに、英語の関係節を基盤とした説明が、日本語本来の構造理解ではなく英語構文への対応付けを促し、その結果、日本語と母語に共通する構造的特徴の把握を困難にする要因について考察する。また、英語を媒介とする翻訳指導は文法項目によって有効性が異なり、連体修飾のように英語とは異なる構文体系を持つ項目では十分な効果が得られない可能性を論じる。さらに、学習者の母語類型や文法項目の特性に応じて、英語媒介・母語媒介・直接法を柔軟に組み合わせる指導の枠組みを提案し、多文化クラスにおける文法指導の改善に向けた実践的示唆を提示する。